

3 焼失住居^(注1)について

(1) はじめに

下老子篠川遺跡では弥生時代後期後半から終末期にかけて、ほぼ連続的な集落が営まれている。この集落跡からは28棟の竪穴建物や平地建物などが検出されているが、このうち3棟の焼失住居が見つかっていることは、第V章のとおりである。筆者は以前、これらの焼失住居について速報的な検討を行い、おもに焼土・炭化材の検出状況と遺物出土状況をもとに火災要因を想定した^(注2)。本稿では、前稿において未検討であった建物の構造について、また検出状況の再検討などから、弥生時代後期後半における焼失住居の一例を正確に把握したいと考えている。

(2) 焼失住居研究の現在

焼失住居は主に竪穴建物において、北海道から九州まで広く認められる遺構である。その多寡は地域や時期によって違いがあり、そのこと自体が特徴のひとつであるともいえる。

竪穴建物研究において、焼けた床面や焼土塊などの存在は早くから気付かれていたことであり、火災という推定も戦後から既に行われている。そうしたなか、大川清氏は床面に堆積した焼土に着目し、伝承・民俗例等の援用からいち早く土葺屋根の竪穴建物を想定し、焼失住居研究の一支流である上屋構造復原の礎を為している。さらに焼失住居の焼失原因についても不慮の火災、忌避的意図による放火の可能性を指摘されている。1976年に行われた長野県市道遺跡の発掘調査において、前原豊・川島雅人両氏は建物の廃絶に伴う放火の可能性を指摘した。市道遺跡9号住居跡では4本主柱のうち3本が、床面上10cm付近で切断されたとみられており、あらかじめ建物を解体した後に火を放つという建物廃絶の一プロセスが復原されている^(注3)。この調査は非常に高い問題意識をもって行われており、今日においてもその資料的価値は高い。1979年、寺沢薰氏は復原住居の火災検証を機に、検出遺構にみられる炭化木材・焼土面・炭灰層などの組み合わせによって分類を行い、焼失住居の認定基準を示した。さらに石野博信氏は「焼失原因」を検討するため、炭化材・焼土の出土状況に焼失住居内の土器遺存状況を併せて分類を行い、その類型から失火・放火（忌避的放火・住居の焼却・戦火）・飛火（類焼）等を措定している。

また1980年代には群馬県黒井峯遺跡、中筋遺跡などの火山灰にパックされた建物が相次いで調査された。これらの竪穴建物の屋根は茅と茅の間に土を挟むサンドイッチ構造で、これまで推論が重ねられてきた土葺屋根の裏付けとなる実資料が初めて発見された。これ以降、焼失住居の調査において内部から焼土が検出された場合には、土葺屋根を想定することが広く一般的になってきた。

1990年代前半には大島直行氏、麻柄一志氏、小林謙一氏らによる焼失住居を巡る論考が発表され、縄文時代を中心に研究が進行した。1996年には山梨県考古学協会によるシンポジウム『住まいの考古学－住居の廃絶をめぐって』が開催され、建物廃絶の一つのあり方として焼却処分が想定されている。このシンポジウムでも扱われた石守晃氏による復原建物の焼失実験は、主柱解体の有無による焼失過程の差異や、草葺上の土の有無による炭化材残存状況などが実証的に報告された。石守氏は2001年にも再実験を行い新たな知見を報告され、焼失住居の構造解明に大きな成果を残している。1999年には考古学ジャーナルにおいて「特集：縄文時代の火災住居」が編まれ、東日本を中心とした研究状況がまとめられた。なかでも岩手県御所野遺跡においては土葺復原建物をはじめ多彩な試みがなされ、これ以降の建物復原には欠かせないモデルケースとなっている。また、小林氏の論考では住居のライフサイクルという視点から、住居がどのようなタイミングで火をうけたのかというテーマで、最終的に

注1 建物=住居と限られている訳ではないことから、一般的に住居と呼称する遺構について本稿では「建物」を使用した。ただし現在広く用いられている「焼失住居」という用語、また研究史において必要に応じ「住居」を採用した。

注2 町田賢一・上田尚美 2000「下老子篠川遺跡の“焼失住居”について」『富山考古学研究』No.3

注3 第4図を参照のこと。

は人々の居住活動を導き出す試みがなされている。また同年、麻柄氏は北陸地方の焼失住居についての概観を行った論考中で、内部に土器のないものについては夏期の火災、土器が残ったものは居住中の冬季の火災という、季節による住み替えを想定した解釈の可能性を論じた。麻柄氏は北陸の弥生後期に焼失住居の数が突出している背景について戦乱の存在を強調しており、建物内出土土器の多寡から火災要因を導くことに否定的である。

2000年代に入っては山陰における弥生時代集落の調査をもとに、建築学的および民族学的視点から浅川滋男氏による復原研究が表された。2003年には再び考古学ジャーナルで特集が組まれ、全国的な研究状況がまとめられている。また同年、杉山祐一氏は焼失住居出土土器の出土状態・平面出土位置・出土土層から類型化を行い、炭化材・焼土などの出土状況と併せた分類によって焼失の背景を想定している。2004年には富山市打出遺跡において下老子釜川遺跡とほぼ同時期の事例が調査され、炭化材、焼土のほか炭化茅も検出されている^(注4)。また、同年、刊行された福島市宮畠遺跡の報告では、縄文時代中期の集落において4割の竪穴建物が焼失住居で、その検証の結果、焼却していた可能性が高いとされている。

焼失住居の研究は「竪穴住居の構造復原」と「焼失原因の解明」という2つの大きなテーマのもとに進行してきたといえる。構造復原については残存状況が良好な資料例の増加によって、豊富なイメージを描くことが出来るようになってきた。ただし、それは現時点における研究成果からのイメージであり、今後発見される資料によっては変更を迫られることも大いにあり得る。一方、焼失原因の解明については、遺跡の立地や建物内の出土状況など様々な属性から、いくつかの解釈がなされてきた。しかし、以前より指摘されているように調査の状況や遺跡の性格は一様ではないため、単純なパターン分類だけで解釈するのは安易であるようだ。それぞれの事例について詳細な検討を行うという基礎作業が第一であり、充分に検討された資料が初めて価値あるものと考える。

（3）下老子釜川遺跡の事例

第V章で遺構の詳細は記載しており、ここでは繰り返しになるが、弥生時代後期後半における3棟の焼失住居について再び検討したい。

B 5 地区 S I 8

隅円方形の平面形をもつ周溝式竪穴建物で、4本の主柱をもつとみられる。中央部には水路があり、また水路西側について調査時には土坑と考えていたため、大半の部分については不明である。

炭化材は長いもので80cmを測り、壁溝付近から中心に向かって放射状に検出された。樹種はクルミ属、コナラ属クヌギ節などである。焼土はみられなかつたが、他の2棟に比べ細かい炭化物が多く、覆土全体にも炭化物が混入していた。このことから燃焼が激しかった状況が想像される。柱穴は1基のみ検出し、底面に加工のある柱根が残っていた。

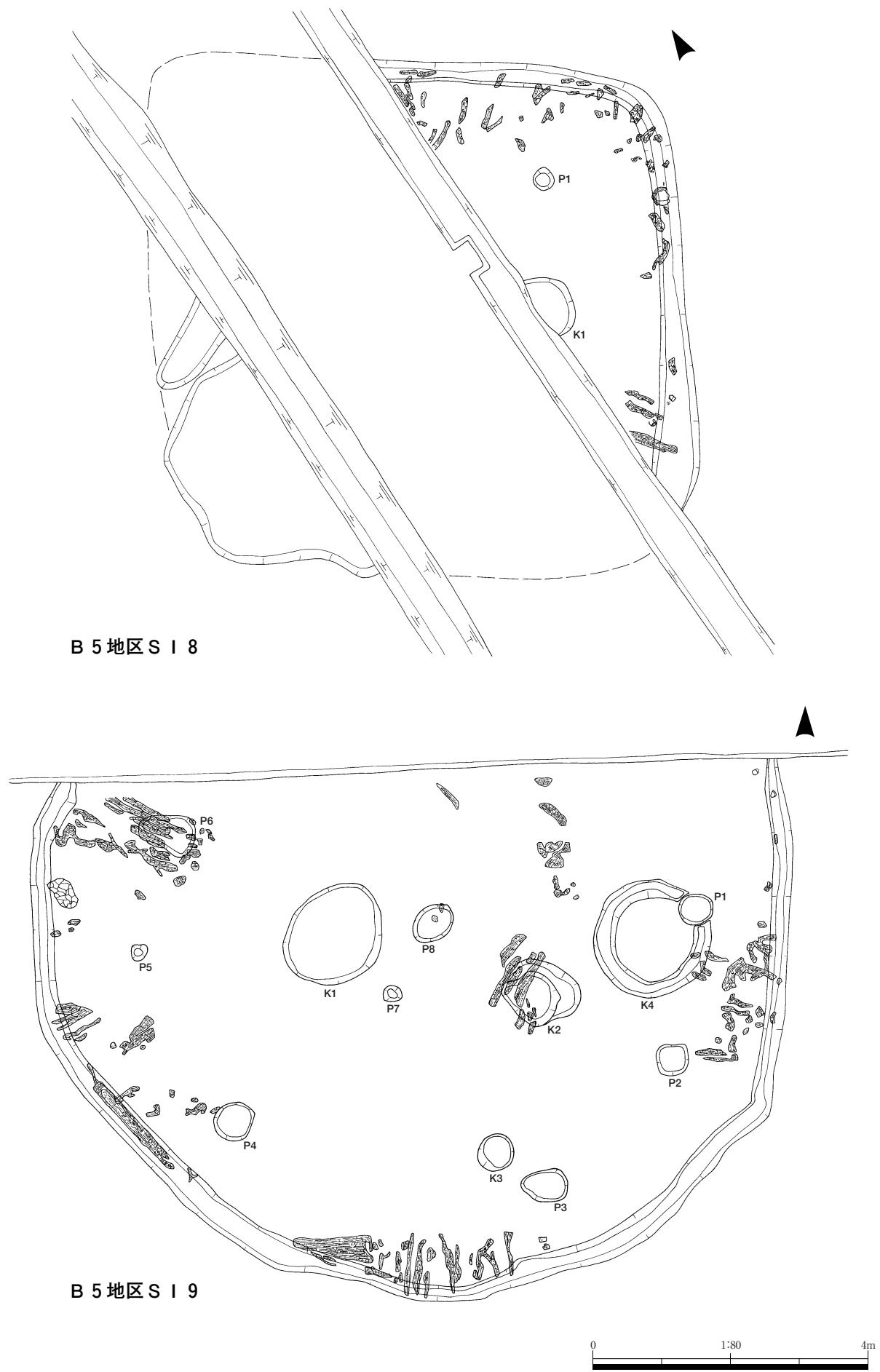
屋内部の出土遺物は量的に多くはなく、特殊な状況とは考えられない。壁溝上面で高杯・甕のほか、管玉未成品や剥片、叩石などが出土しており、小規模な玉作りを行っていたことが伺える。

B 5 地区 S I 9

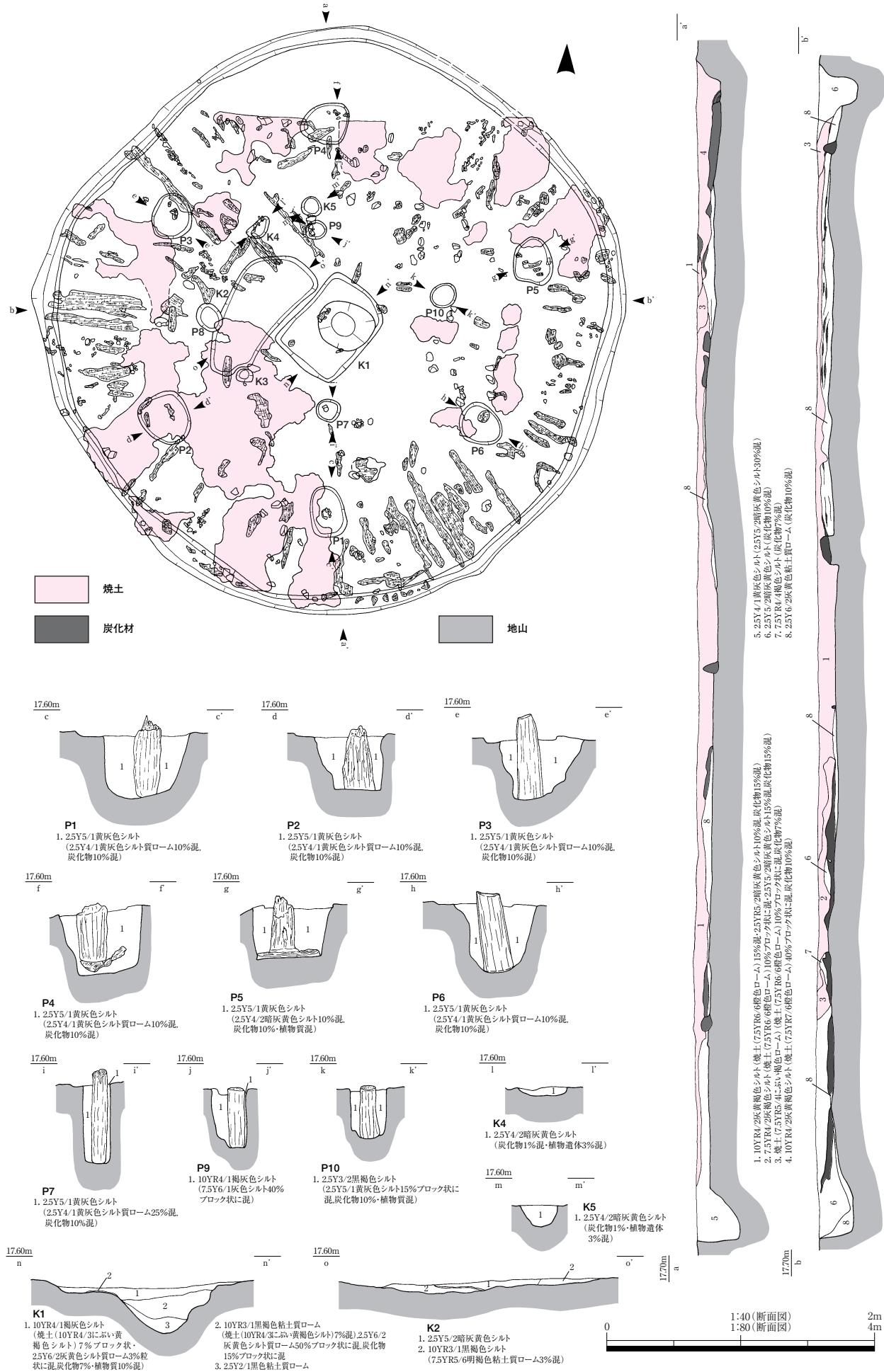
円形の平面形をもつ周溝式竪穴建物で、8本の主柱（P1～6）と内側に支柱（P7・P8）をもつとみられる。北側は調査区外につづき不明である。また、この建物は新旧2棟が重複したもののうち新しい建物であると考えられるが、断面観察によればこの建物に伴う覆土はごく浅く、遺物の混入が疑われる。

炭化材はS I 8同様、壁溝付近から中心に向かって放射状に残っており、これらは垂木と考えられ、

注4 詳細について調査担当者である富山市教育委員会小黒智久氏にご教示頂いた。



第1図 B5地区 S18・S19 炭化材出土状況図



第2図 B 5地区 S 10(新) 炭化材・焼土出土状況図, 土層断面図, 柱穴・土塙断面図

樹種はスギなどである。この他に壁溝内または壁溝に沿うような状態で検出された板材や、建築材に転用されたと考えられる水盛りがみつかっている。また、中央付近の土坑上には数本の炭化材が並んだ状態で残っており、焼け落ちた上屋部材、または土坑の蓋状施設の可能性が考えられる。これらの樹種はヤマグワである。焼土についてもS I 8同様みつかっていないが、この屋内部の覆土からは炭化物に混じって礫が目立ち、上屋に載っていたものか、消火用の土砂投げ込み等が考えられる。柱は6本の主柱と2本の支柱を検出したが、うち5基で柱根、2基で礎板が残っていた。

遺物は壁溝際に横位で潰れた状態の甕などが出土しているが、量的には多くない。この他、管玉未成品、剥片などが出土しており、小規模な玉作りを行っていたとみられる。

B 5 地区 S I 10 (新)

円形の平面形をもつ周溝式竪穴建物で、6本の主柱とその内部の4本の支柱から構成される。3棟中最も炭化材が多く、この建物からは焼土も検出している。

炭化材は全体的にみられ、中心に向かって放射状に検出されたものは垂木と考えられる。その他、垂木と直行する向きの炭化材もみられ、桁や梁の可能性がある。樹種はコナラ属コナラ節、ヤマグワなどである。焼土はほぼ全面にみられたが、特に壁溝から支柱にかけての部分で厚く堆積しており、天井部以外は土葺であったと想定される。また10本の柱のうち9本で柱根が残っており、2基では柱根下に礎板が残っていた。外側6本の主柱は太い材、内側4本の支柱が細い材を用いていたとみられ、計画的に材を使用していたようである。残存していた柱根の観察から全ての底面が加工されており、うち主柱2本(P 3・P 4)については側面にも加工痕があり、方形の柱を意図していたようである。また、支柱3本(P 7・P 9・P 10)の上面は切断されている可能性があり^(注5)、これは建物の廃絶に伴う解体行為の存在を示唆するものである。

遺物は壁溝付近から甕・壺・高杯などが出土している。この他、緑色凝灰岩・鉄石英・石英などの原石・未成品・剥片が非常に多く出土しており、玉作りの中心的施設であった可能性が高い。

(4) 上屋構造復原について

焼失住居の調査研究による成果は、建物の復原に大きな変化をもたらしている。茅葺屋根が常識とされていた復原建物であるが、残存状態の良好な資料の蓄積などから土葺屋根を採用するケースが増えてきている。実際に復原された土葺建物を目の当たりにし、従来のイメージとの違いに驚いた覚えがあるが、当然のことながら根拠に基づいた復原であり、不要な固定観念があることを実感した。

下老子笛川遺跡は調査後破壊され既にその姿を見ることは不可能であるが、調査では膨大なデータを得ることができた。焼失住居についてはB 5 地区 S I 10 (新) から得られるデータが最も多く、上屋の復原に関しても資料的価値の高い情報が提供できると思われる。そこで、この資料を中心として他の遺跡での事例との比較検討をしたい。

第3図の1は宮本長二郎氏による下老子笛川遺跡 S I 10 (新) の復原図である。柱穴の配置など、若干の誤認があると思われるが、検出状況から屋根上半草葺、下半土葺の二段伏屋式平地住居とされている。実際には多角形に配された主柱の内側にさらに4本の支柱が立つので、上部は構造が異なるようにも思われる。また焼土の検出状況から内側の支柱部分にまで土が載っていた可能性があり、土葺はもう少し上まで施されていたと想定される。

2は浅川滋男氏による鳥取県南谷大山遺跡における復原案である。この事例は丘陵の尾根で検出された弥生後期後半の焼失建物をもとに復原されている。炭化材の観察から板材と丸太材が垂木として併用されており、さらにこれら垂木の上には直交して茅の束が水平方向に載っていたことを確認して

注5 柱根観察について新宅西氏よりご教示を得た。また、観察は遺物保存処理後であったため判断が困難であるものも多かった。

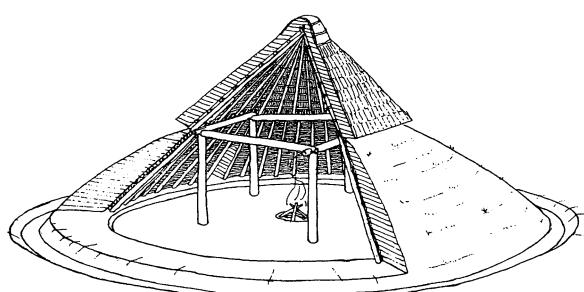
いる。これらを下地として土が葺かれたものと考えられ、また焼土は主柱の内側で確認出来ないことがから、宮本氏のいう二段伏屋式が想定された。

3は同じく浅川氏による鳥取県妻木晩田遺跡における復原案である。この事例もまた丘陵上に位置する弥生後期後葉の焼失建物である。板材の垂木は密に配列され、その上に水平方向の茅、さらにその上に求心方向の茅、という具合に茅を縦横に重ねる土葺下地であったことがわかっている。

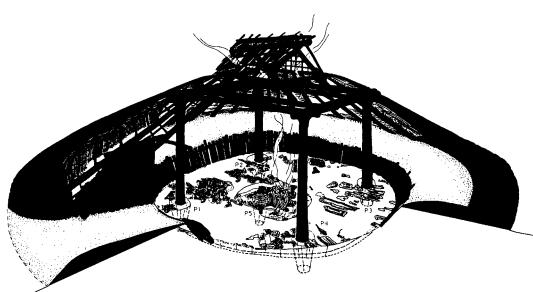
4も同じく浅川氏による岩手県御所野遺跡における縄文中期後半の大型竪穴住居とされる復原案である。この中では唯一、縄文時代の建物であり建築構造的にやや異なるが土葺復原建物の先駆事例として挙げた。弥生時代の建物と異なる点の一つは屋根の勾配であろう。御所野遺跡の場合、竪穴が深く掘られているため垂木がなだらかな角度であるのに対し、他の弥生時代の事例では垂木の角度がきつくなっている。

下老子笹川遺跡S I 10（新）では炭化材、焼土は検出したが炭化茅については確認しなかったため、土葺の下地にまで言及することはできない。ただし垂木と考えられる炭化材のなかには、板材とみられるものも混在しており、浅川氏による「板状の垂木が検出された場合、上屋が土葺きの可能性はきわめて高い」という指摘（浅川1998）からも、2・3と似た構造をもつ土葺屋根が想定される。また、垂木と考えられる炭化材で、主柱内側にある支柱をつなぐラインにまで達するとみられるものがあり、かなり上部まで土で葺かれていた可能性も否定できない。しかし内側の支柱が、実際にはどのような上屋構造をとるのか、現時点では不明であり、もし実際に多主柱+支柱という構造であったとしたら、屋内空間が柱だらけの状態のようにも思える。さらに屋内については、2・3・4が竪穴建物であるのに対し当事例は平地建物であるため、壁の存在はあまり意識されていないことが推定される。当遺跡A 8 地区S I 4では高さ20~30cmの周堤上において、周壁から0.5~1 m離れた同心円上に径20~30cmの小穴が並んで検出されており、これらを垂木尻を挿した痕跡と考えている。この事例から考えても、壁というよりは低い棚状のスペースが巡る屋内構造であったと考えられる。出入口についても決定的な根拠はないのだが、主柱穴の配列からはP 4 – P 5間のピッチが他に比べて空いていることが指摘でき、この位置付近が有力視される。

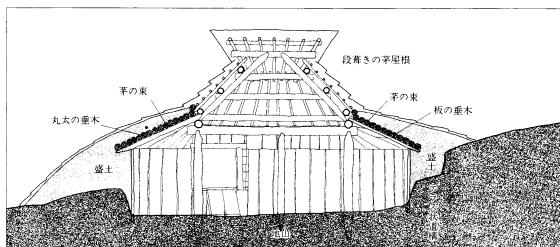
S I 8・9についてはデータが少なく詳細な検討は難しいが、それぞれ異なる主柱配列であったと



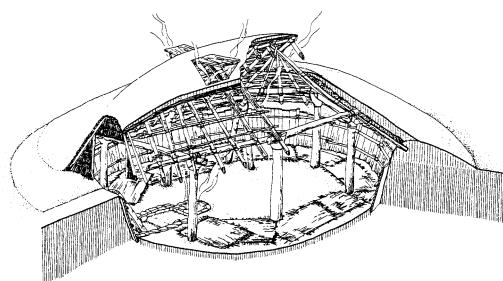
1.下老子笹川遺跡



3.鳥取県妻木晩田遺跡



2.鳥取県南谷大山遺跡



4.岩手県御所野遺跡

第3図 土葺建物復原図

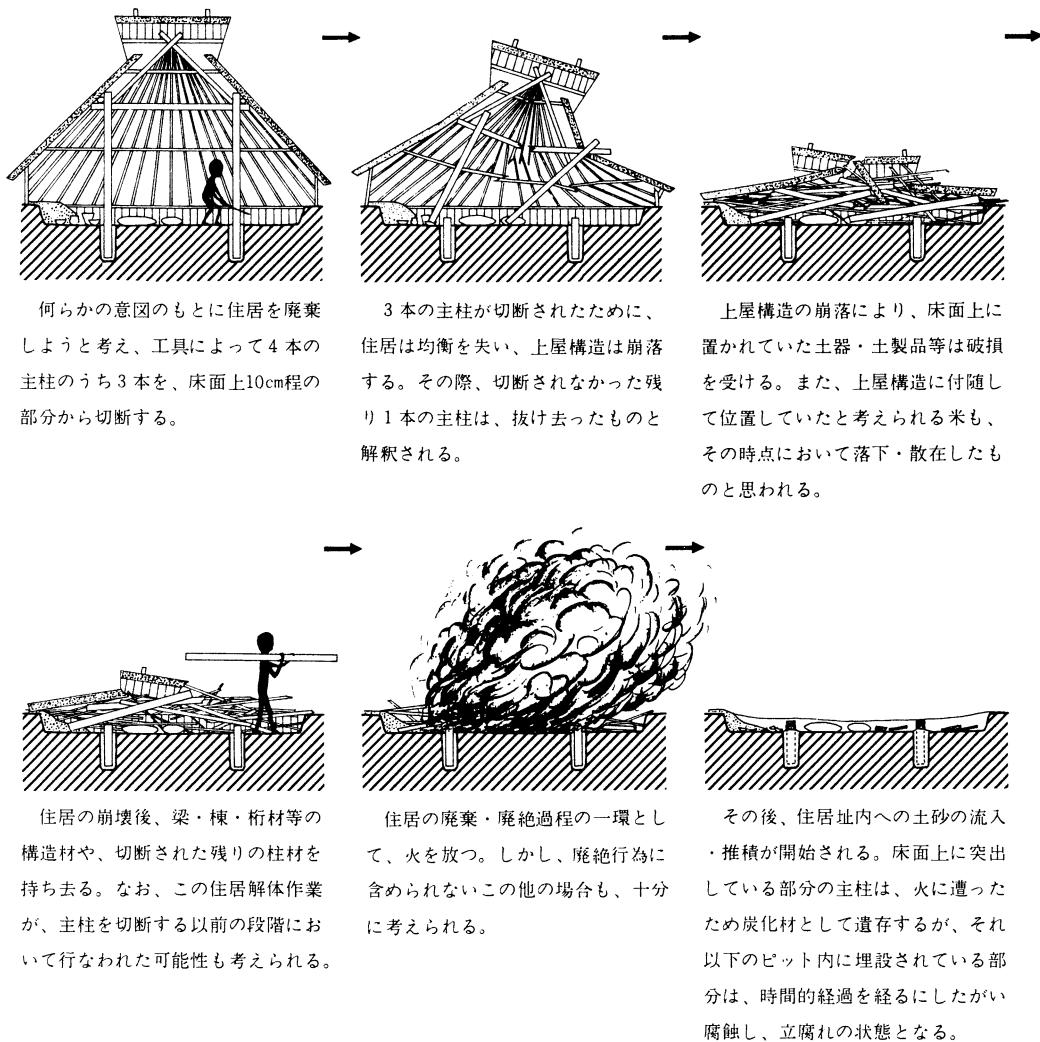
（1.（宮本2003）、2.（浅川1994）、3.（浅川2000）、4.（高田・西山・浅川1998 b）より抜粋）

みられる。このことからは、同時存在ではないとしても、大差ない時期に存在した建物において、上屋構造が一様ではないことを示すと考えられる。これが建物の性格によるものかは定かでないが、意図的に焼却されたと推定されるこれら3棟の焼失住居について、柱構造が全て異なるという事実は非常に興味深い。

(5) 焼失原因について

前稿では、焼土・炭化材の検出状況と、屋内での遺物出土状況を併せて3棟の焼失住居が意図的に焼却されたものであるとした。今回、建築材の検討から、S I 10（新）については建物上屋を解体処理した後、焼却を行っている可能性が高まった。

研究史でふれた長野県市道遺跡の焼失住居は、4本主柱のうち3本が切断された後、焼却していることを確認した最初の事例である。S I 10（新）では主柱ではなく、内側の支柱に切断の可能性が高いとみられる痕跡が認められた。出土したその他の主柱先端部には、切断の可能性を否定できないものもあるが確実とは言えず、立ち腐れのような状態のものが多かった。また市道遺跡の場合、床面から約10cm上で切断されていたと報告されているが、S I 10（新）では特にそのような傾向は認められず、炭化材や焼土の下で検出されるものがほとんどであった。ただし、焼却後の屋内部には攪乱がみられないことから、片付けや持ち出し等は行われていないと考えられる。切断されたと考えられる柱は主柱に比べて細いため、仮に再利用のための切断だとすると、なぜ太い主柱を切断していないのか疑問に感じられる。しかし焼失実験の成果などからは、焼却の際、建物に手を加え解体しておくと燃



第4図 長野県市道遺跡建物廃絶過程模式図
(1976市道遺跡発掘調査団 より抜粋)

焼しやすくなることが解っており、再利用のための柱持ち出しというよりは、効率よく焼却廃棄するための上屋崩壊と推測される。

焼失原因について再検討したが、結果的には前稿での意図的焼却という推測を再確認することとなった。S I 8・9については柱の切断等は確認していないため推論は想像の域を出ないが、重複した建物のうち最も新しい建物であるという特徴などから、最終的に場を放棄する際、焼却という選択肢を採ったのではないかと推測する。しかし下老子笛川遺跡弥生後期後半の集落において焼却廃棄されたのはこの3棟に限られており、その位置関係からみても集中している印象は否めない。特にS I 10(新)については、柱配置、柱加工における特異性、出土した玉作り関連遺物(剥片等も含めて)が多種であったことを考えると、象徴的な建物であった可能性も考えられる。

(6) まとめ

焼失住居の調査という経験から、建物の廃絶について強く関心を持つようになった。調査する建物のほとんどは被熱痕跡のない埋没した建物であるが、廃絶した遺構という意味では同じである。今回、研究史のみで全くふれることができなかつたが、調査するうえで住居のライフサイクルという意識が非常に有効であると感じた。発掘調査で検出されるのは、つねに建物の最期の姿であるように思うが、それはライフサイクルの中ではどの状態の遺構なのか?という問題意識を携えて調査することによってさらに多くの情報を確認でき、分析視野を広げていけるはずである。 (町田尚美)

引用・参考文献

- 浅川滋男 1994「焼失竪穴住居の復原—ASI 1とBSI20による二段伏屋式構造—」『南谷大山遺跡Ⅱ』(財)鳥取県教育文化財団
 浅川滋男 1998『先史日本の住居とその周辺』
 浅川滋男 2000「妻木山地区SI-43の上部構造—焼失竪穴住居の復原研究—」『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅳ〈洞ノ原・松尾城地区〉』大山町教育委員会・大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団
 浅川滋男 2001『竪穴住居の空間分節に関する復原研究』
 石野博信 1985「古代火災住居の課題」『末永先生米寿記念献呈論文集』
 石守 晃 1995「復元住居を用いた焼失実験の成果について」『研究紀要12』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
 石守 晃 2001「復元住居を用いた焼失実験 再び」『研究紀要19』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
 石守 晃 2003「焼失実験と関東北部の焼失住居」『考古学ジャーナル』No.509
 市道遺跡発掘調査団 1976『市道 長野県佐久市市道遺跡の発掘調査』
 大川 清 1954「住居址における焼土について」『古代』第7・8合併号
 大島直行 1994「縄文時代の火災住居—北海道を中心として—」『考古学雑誌』第80巻第1号
 岡野雅則 2003「山陰地方の焼失住居」『考古学ジャーナル』No.509
 小黒智久 2005「富山県打出遺跡」『考古学研究』第52巻1号
 小林謙一 1994「竪穴住居の廃絶の姿—SFC遺跡・大橋遺跡の縄文中期の事例から—」日本考古学協会第60回会議発表要旨
 小林謙一 1999「いわゆる「火災住居」跡の調査と解釈」『考古学ジャーナル』No.447
 杉山祐一 2003「「焼失住居跡」の可能性を考える—研究成果と調査方法の考察を通じて—」『研究紀要』3 財団法人印旛郡市文化財センター
 高田和徳・西山和宏・浅川滋男 1998a・1998b「縄文時代の土屋根住居の復原(一)・(二)」『月刊文化財』No.417・418
 高田和徳 2003「焼失住居跡の分布とその意味」『考古学ジャーナル』No.509
 寺沢 薫 1979「火災住居覚書」奈良県立橿原考古学研究所彙報 青陵No.40
 福島市教育委員会 2004『宮畑遺跡(岡島)確認調査報告書』
 麻柄一志 1992「土屋根の竪穴住居」『魚津市立博物館紀要』第3号
 麻柄一志 1999「焼かれた村—北陸地方の火災住居について—」同志社大学考古学シリーズVII『考古学に学ぶ—遺構と遺物—』
 麻柄一志 2003「北陸地方の焼失住居」『考古学ジャーナル』No.509
 宮本長二郎 2003「弥生・古墳時代の建築」『歴史遺産研究』創刊号 東北芸術工科大学歴史遺産学科
 山梨県考古学協会 1996『すまいの考古学—住居の廃絶をめぐって』資料集